第七回 東北お遍路写真コンテスト

最優秀賞

西山　栄（福島県いわき市）
『海辺でのフラダンス』

新型コロナウィルスの影響で中止になっていたいわき市の海開きが、3年ぶりに開催されました。ここ薄磯海水浴場はメインの海開き会場となり、高校生によるフラダンスなどで来る夏を楽しみにしていました。
（撮影・福島県いわき市薄磯海岸／令和4年7月16日）

優秀賞

佐々木　均（宮城県多賀城市）
『3年ぶりの港祭り』

3年ぶりの港祭り。塩釜神社 表坂202段。
神を迎える人々の風景です。
（撮影・宮城県塩釜神社／令和4年7月18日）

門林　泰志郎（福島県いわき市）
『今年も来ました～応援隊』

富岡町夜の森は今年も桜が満開。恒例の「よさこいひょっとこ連」が演舞に来ましたよ～。夜の森に妖精が登場。　喜びをありがとう～！夜の森の桜。応援をありがとう～！ひょっとこ連。
（撮影・福島県富岡町夜の森／令和4年4月10日）

佳作

庄子　喜一（宮城県名取市）
『網おこし』

ドン・ドドーンと勇壮な太鼓の音が響き渡ります。演奏しているのは閖上太鼓保存会のメンバーです。太鼓の演奏途中で「網おこし」という漁の様子を現した演舞が行われます。網の中には魚がいっぱいです。
（撮影・宮城県名取市閖上／令和4年9月25日）

高橋　達也（宮城県東松島市）
『奥松島銀河鉄道』

東松島市宮戸の復興再生多目的施設「あおみな」に銀河鉄道をイメージしたイルミネーションが設置されました。多重撮影で、蒸気機関車が空に向かって飛び立つように撮影しました。
（撮影・東松島市宮戸／令和4年1月10日）

瀬川　征吉（青森県八戸市）
『次代に羽ばたく蕪島神社・一番札所』

巡礼地一番札所の蕪島神社。大震災後の2015年秋火事で焼失。その後、全国に支援の輪が広がり、無事に2019年に完成！いみじくも今年は蕪島が国の天然記念物指定百年の年。人と鳥よ　永遠に続け！
（撮影・蕪島神社／令和4年3月8日）

村上　美保子（福島県新地町）
『希望の牧場』

福島原発から20キロの牧場。被爆牛には殺処分の命令が出た。「俺は牛飼いだ。殺せるか！11年間、食肉に出来ない360頭の牛を飼っている。牛を飼うことが俺の反原発運動だ！」と彼は息巻いた。震災以前と変わらない風景があった。
（撮影・福島県浪江町／令和4年11月8日）

村上　淳（宮城県気仙沼市）
『潮吹きと龍の松』

あの日の奇跡が生んだ龍の松。すっかり気仙沼の観光名所になった。龍の松よ、昇竜となり岩井崎の潮吹きの力を借りて天に昇って行け。そして海と生きる気仙沼を優しく上空から見守ってほしい。気仙沼は負けない。
（撮影・気仙沼市岩井崎／令和4年7月31日）

丹治　郁夫（宮城県富谷市）
『それぞれの祈り』

3月11日の昼過ぎ、深沼海岸堤防近くにある「荒浜慈聖観音」には、お坊さんがお経をあげ、隣の慰霊碑には中年のご夫婦が静かにそれぞれ祈りを捧げていました。
（撮影・仙台市深沼海岸／令和4年3月11日）

岸　浩子（岩手県陸前高田市）
『高田松原津波復興記念公園献花台』

誰が手向けたのだろう。百合の花が潮風にゆれている。献花台から広い広田湾を見渡す。この海にまだ帰ることが叶わない200人もの人達が眠っている。海と陸の迫の若松の緑と成長が残った私たちにエール。
（撮影・高田松原津波復興記念公園／令和4年6月9日）

庄子　源六（仙台市若林区）
『荒浜避難の丘（鎮魂の風せんとばし）』

毎年行う鎮魂の風せんとばしですが、もしこのイベントの最中に津波の情報が流された時はあの避難の丘に登ろうと思った人も多くいたようでした。その様子が感じられ写真を撮りました。
（撮影・仙台市荒浜小学校／令和4年3月11日）

佐藤　尚子（福島県伊達市）
『百日紅のひとりごと』

今年は見物人がたくさん来たな。コロナなんか何でもない。空から「放射能」が降ってきた時は、驚いたな。町には人がいなぐなったからな。杖をつかせてもらって、もうちょっと長生きすっと。……百日紅のひとりごと
（撮影・相馬小高神社／令和4年7月26日）

市川　清一（青森県八戸市）
『ぼくらの壁画』

1995年7月に大蛇小学校の親子共同で作られた壁画です。2011年大震災にもビクともしないで、今でも訪れる人々を暖かく出迎えています。
（撮影・青森県階上町／令和4年6月13日）

〈 第8回東北お遍路写真コンテスト作品募集！ 〉

■募集テーマ：風景・人物・祭りなど、東北お遍路に因む写真
■応募方法：写真は2Lサイズのプリントで、コメント（100字以内）と一緒にお送りください。写真とコメントで審査します
■応募期間：2023年10月30日（必着）
▶作品の送り先：976-0022福島県相馬市尾浜字南ノ入241-3　東北お遍路コンテスト係

❖ 青柳　健二（写真家）

「東北お遍路写真コンテスト」の趣旨として、写真の説明だけではなく、被写体に対する思いや、そういうことだったのかと気がつかせてくれる写真など、コメントと写真の相乗効果が出ている作品が上位に入ったと思う。震災からようやく復興というときに、今度は新型コロナのパンデミックだ。だから震災やコロナ禍で中断され、ようやく再開された祭りやイベントにはそのうっぷんを晴らすエネルギーを感じる。最優秀賞になった作品は、コメントから、コロナ禍で海開きも中断されていたのだと知る。学生たちもこの3年間、行事やイベントの中止などによって、いい思い出が作れていない。そんな事情を知ると、フラダンスをする高校生たちの姿が特別愛おしくなる。

❖ 結城　登美雄（民俗研究家／東北お遍路創生委員）

東日本大震災の被災地現場をカメラをもって訪ね歩き、そこで出会った人やものや自然などから心に響くものを感じてはシャッターを切り続ける人が、今年もまた多くいるなと感じさせてくれた。今年の応募作品はそうした中で突出したものは少なかったが、写真だけでは伝えきれない思いを短かなコメントで補いフォローし、結果として深みのあるメッセージが見る者の心をとらえ、胸にひびく。そうした作品をながめながら私の心に勝手な思いがあふれる。これまで応募された全作品を一枚残さず一堂に集め展示したら何が見えてくるのか。上手、下手だけではなく、向かい合い、たどり考えるのが東北お遍路の写真の価値なのではないか。しみじみとそう思った。